

スペイン語の「条件法」相当語形のいくつかの問題について
Algunas observaciones sobre el "condicional" en español 1)

秦 隆 昌
Takamasa HATA

この動詞形の法・時制とその名称については、いろいろな議論があるので、ここではひとまず *ría* 形と呼ぶことにする。*ría* 単純形はラテン語の不定法現在 + *habēre*の直説法未完了過去を起源とし、また複合形は助動詞 *haber* (XVI~XVII世紀頃までは自動詞、再帰動詞には助動詞として *ser* を使用) の *ría* 単純形に過去分詞を加えたものである。従って、この2形はフランス語の条件法現在及び過去とまったく同じ起源に由来するものであり、ポルトガル語、ガリシア語、カタルーニャ語などでも、これとほぼ同じ経過をたどって作られた動詞形が存在する。本稿では最初に現用スペイン語における用法を整理し、更に時代をさかのぼって *El Quijote* と *El Cid* における用例を概略これと比較し、歴史的にこの動詞形の用法が大きく変化していないかどうかを確かめた上で、叙法論に関するいくつかの論点を取り上げてみたいと考えている。

1. 現用スペイン語における *ría* 形の用法

ría 形の用法についてはいろいろな整理の仕方があるが、ここでは、後の叙法論との関連から、全体を大づかみにして、単純形、複合形のそれぞれを4種類に分けることにした。
<単 純 形>

1.1 過去未来 (過去から見た未来)

◦ Dijo que asistiría a la reunión. <彼は集会に出ると言った> 2)

1.2 過去・現在・未来についての推量、可能性、疑惑

◦ Tendría entonces cincuenta años. <当時彼は50才くらいだったろう>

◦ Dudo si llegaría a tiempo. <彼が間に合ったかどうか疑わしい>

1.3 現在・未来の婉曲な表現

◦ Podría ir contigo, pero estoy cansado. <君と一緒に行ってもいいけど、僕は疲れているんだよ>

◦ Desearía hablar con usted. <よろしければあなたとお話しがしたいのですが>

1.4 現在の事実と反する事柄、あるいは未来の実現性の疑わしいことがらを仮定する条件文 (または譲歩文) の帰結節での使用

◦ Si tuviese (o tuviera) dinero compraría esta casa. <もし私にお金があったらこの家を買うのだが>

◦ Aunque se muriera de hambre no trabajaría. <彼はたとえ食べていけないほど貧乏しても働こうとはしないだろう>

<複 合 形>

1.5 過去未来完了 (過去から見た未来完了)

◦ Todos suponían que cuando llegase el invierno la guerra habría terminado.

<冬が訪れるころには戦争が終わっているだろうと誰もが思っていた>

1.6 過去のある時まで完了したことについての推量、可能性、疑惑

◦ Creía que habría llegado Juan. <私はフアンがもう着いているだろうと思っていた>

◦ Dudaba si habrían llegado a tiempo. <彼らが間に合ったかどうか私は危ぶんでいた>

1.7 現在までに完了したことについての婉曲な表現

◦ Habría querido hablar con usted un momento. <あなたと少しお話がしたかったのですが（できなくて残念です）>

◦ Juan habría podido ser más discreto. <フアンはもっと慎重に振る舞うことができただろうに>

1.8 過去の事実と反することがらを仮定する条件文（または譲歩文）の帰結節での使用

◦ Si hubieses salido pronto, habrías cogido el tren. <すぐ出かけていたら君は列車に間に合ったのに>

2. *El Quijote* における用例

近代スペイン語初期の例として *Don Quijote*（第1部）のいくつかの章から用例を拾ってみよう。なお、テキストとしては1605年初版のファクシミリ版を使用した。³⁾

<単純形>

2.1 過去未来

◦ A lo qual dixo Dorotea, que ella haría la donzella menesterosa mejor que el barbero, ... (Cap. 29) <（ドン・キホーテを旅先から家に連れ戻す相談の中で）……これに対してドロテアは、自分の方が床屋よりも上手に助けを求める乙女の役を演じてみせると言った……>

2.2 過去・現在・未来についての推量

◦ La del Alua sería, quando don Quixote salio de la venta, tan contento, tan gallardo, tan alborogado, por verse ya armado cauallero, que el gozo le rebentaua por las cinchas del cauallero. (Cap. 4) <ドン・キホーテが、とうとう騎士に叙せられるたことで、その喜びが馬の腹帯のところで破裂するかと思われるほどに満足し、さっそうとした気持ちで、喜び勇んで宿を出たのは夜明けごろだったろう>

◦ O, replicò el cabrero, aun no se yo la mitad de los casos sucedidos a los amantes de Marcela, mas podría ser que mañana topassemos en el camino algun pastor que nos los dixesse, ... (Cap. 12)

<（ドン・キホーテに対して）山羊飼いは答えた。「ああ、私はマルセーラに恋する男たちに起こった出来事の半分も知りません。でも、明日、道中でそのことを話してくれる羊飼いにひょっこり出くわすかも知れません」>

2.3 現在・未来の婉曲な表現

◦ Qualquiera yantaría yo, respondió don Quixote, porque, a lo que entiendo me haría mucho al caso. (Cap. 2) <「どんな物でも食べさせて頂こう。察するところ、ちょうど時間もよろしいようなので」とドン・キホーテは答えた>

2.4 条件文・譲歩文の帰結節での使用

◦ si yo fuese rey por algun milagro de los que vuestra merced dice, por lo menos, Juana Gutierrez, mi oislo, vendría a ser reina, y mis hijos infantiles. (Cap. 7) <（ドン・キホーテに対するサンチョの言葉）「旦那様が言われる何かの奇跡の

お陰で、万が一私が王様になれたとしたら、愛妻のファナ・グティエレスはお后で、子どもたちは王子様になる訳ですねえ」

- tengo para mi, que aunque llouiesse Dios Reynos sobre la tierra, ninguno assentaria bien sobre la cabeça de Mari Gutierrez. (Cap. 7)

(サンチョの妻が王妃になれると言うキホーテの話に答えて)「たとえ神様が王国を地上に雨のように降り注いでくださったところで、どれ一つとして(妻)マリ・グティエレスの頭の上にもうまくおさまる訳はないと思っています」

<複合形>

2.5 過去のある時まで完了したことについての推量

- Tres quartos de legua aurian andado, quando descubrieron a don Quixote entre vnas intrincadas peñas, ya vestido, aunque no armado, y ... (Cap. 29)

<入り組んだ岩山の間で、鎧はつけていなかったが、既に衣服をつけていたドン・キホーテを彼ら(サンチョとドロテア)が見つけたのは、4分の3レグアほど進んだところだったろう。そして・・・>

3. El Cid における用例⁴⁾

この時期の *ría* 複合形には、現在のフランス語と同様に2種類の助動詞 *haber* と *ser* が使われている。また単純形はラテン語の *habere* に由来する語尾の部分不定形から分離し、間に代名詞など他の語が挿入された形で現れる例が比較的多く見られる。

3.1 過去未来

- (1943) "Con todo esto, a vos dixo Alfons
(1944) que vos vernié a vistas do oviéssedes sabor;
(1945) querer vos ye veer e darvos su amor,
(1946) acordar vos yedes después a todo lo mejor."

(Minaya即ち Alvar Fáñezのエルスドへの言葉)「以上の話の他にアルフォンソ王は、あなた様の望まれる場所に出向いて会おう、あなた様に会って友好の情を示したい、その後、双方の間で最善の取り決めがなされるであろうと仰せられました。」

3.2 現在・未来の推量、可能性

- (0527) "Moros en paz, ca escripta es la carta.
(0528) buscar nos ie el rey Alfonso, con toda sue mesnada."
(エルシドの言葉)「和平協定に署名したのでモーロ人は友好的であるが、アルフォンソ王が家臣達を総動員して我々を探索にくるかも知れない」
- (1373) "Mucho creçen las nuevas de mio Çid el Campeador,
(1374) bien casariemos con sus fijas para huebos de pro.
(1375-) Non la osariemos acometer nos esta razón, ..."

(Carriónの2人の王子達の秘かな会話)「戦士我がシドが大変な評判になっているので、我々の利益のためには彼の娘達と結婚することが得策であろう。この話は人には内緒にしておいた方がよかろう」

3.3 現在・未来の婉曲な表現

- (0104) "¿0 sodes, Raquel e Vidas, los mios amigos caros?"

(0105) En poridad fablar querría con amos.”

(砂の箱を黄金の箱とだまして金を借りるためユダヤ人 Raquel と Vidas にエルシドの重臣 M. Antolínez が話しかける)「私の親友の Raquel と Vidas はどこにいますか。私はお二人と内密の話がしたいのですが」

○(2082) ”Non abría fijas de casar”, respuo el Campeador,

(2083) ”ca non han grant hedad e de días pequeñas son.”

(Alfonso 王からエルシドの娘達を Carriónの王子達の結婚相手に所望されたのに答えて) 戦士エルシドは答えた:「私どもに結婚させるにふさわしい娘があるとは申せませぬ。娘どもは年端も行かず、まだ幼うございます」

3.4 条件文・譲歩文の帰結節での使用

○(1080) lo que non ferié el caboso por quanto en el mundo ha,

<そんなこと(一度 Barcelona 伯を釈放すると言った前言を翻すこと)は、非の打ちどころのないこの人物(エルシド)なら、たとえ世界中にあるすべてのものと引き替えても、やりはしなかったであろう>

○(3517) ”si a vos le tollies, el cavallo no havrie tan buen señor.”

(名馬 Babieca を献上したいとのエルシドの申し出に対する Alfonso 王の言葉)「もし汝がその馬を手放せば、馬は将来これほど立派な主人を持つことがないであろう」

<複合形>

3.5 過去未来完了

○(1240) ”por amor de rey Alfonsso, que de tierra me a echado”

(1241) nin entrarié en ella tigeria, ni un pelo non avrié tajado,

<「私を国から追放したアルフォンソ王に対する愛の証として」髭にはさみが入ることはないであろうし、髪の手一本切り落とすこともしないであろう>(全体がエルシドの言葉であると見てよいが、直接話法になっているのは1240行のみ。avrié tajado は殆ど過去未来と同義であるが、この物語が語られている時点から見て、物語の中の未来のある時まで完了することを想定した上での否定表現と解釈して「過去未来完了」に分類した。なお、エルシドは物語の最後まで髭や髪を伸ばしたままにしている)

3.6 過去のある時まで完了したことがらについての推量

○(2348) Mas se maravillan entre Díago e Ferrando,

(2349) por la su voluntad non serien allí llegados.

(エルシド支配下の Valencia をモロッコ王 Bucarの軍が襲撃してきた時、エルシドの軍がこれを迎え撃つ場面)<彼ら(エルシド軍の一般のキリスト教徒の兵士達)以上に驚嘆していたのは(王子の) Díagoと Fernando であった。というのは、彼らは自ら進んでそこにやって来ていたのではなかったであろうから>

4. ría 形の叙法について

前2節で *El Quijote* と *El Cid* における ría 形の用例を現用語と比較したが、作品全部に当たっていないので、複合形を含めて8項目に分類したすべての用法を古い作品から拾いあげることではできなかった。ただ、過去数百年間に接続法未来や接続法過去 ra 形のように、かなり用法が変化した語形がある中で、ría 形の用法には大きな変化が見られな

かったことは概ね確認できたように思う。

この語形は1492年の Nebrija の『文法』以来、スペイン文法では長い間「接続法」に分類されていたが、「直説法」説、「可能法」説をめぐって色々議論があり、現在では「直説法」論が支配的になったように見受けられる。しかし、この議論は完全に決着がついた訳ではない。この語形の叙法についての主な論点を整理しておきたい。

4.1 Bello の叙法論

Bello は、ある語句に従属し、それに支配された動詞の屈折を「叙法」と定義し、「真に叙法を区別するものは支配関係なので、その支配関係によってのみ我々は叙法を分類し、定義することができる」と言う。そこで La fortuna te sea propicia. <君が幸運に恵まれますように>のように、一見支配関係がないように見える単文も、文頭に Deseo que<私は願っている>を補い、動詞 desear に支配されていると見ることによって sea を接続法と判定する。同じ考え方で、直説法の動詞を持つ単文は、その前に Sé que <私は知っている>、Digo que<私は言う>、Afirmo que<私は断言する>などが省かれていると解釈する。彼はまた「同じ環境にあるか、または人称、数、時制のみが異なる語句によって支配される動詞の屈折は同じ「叙法」に属する」という原則を立て、叙法判定の1つの基準にしている。

Me parece que anoche llovió. <私は昨夜雨が降ったように思う>

Me parece que mañana lloverá. <私は明日雨が降ると思う>

Ayer me pareció que hoy llovería. <昨日私は今日雨が降ると思った>

これらの文の parece, pareció は、同じ動詞 parecer の実現形で、時制が異なるだけなので、それによって支配される従属節の動詞 llovió, lloverá, llovería は同じ叙法に属することになる。そして llovió, lloverá が直説法であることを認めるなら、当然 llovería も同じ叙法でなければならないという論法で llovería を「直説法」とであると結論する。

4.2 Academia (1917年) の文法

Real Academia Española は amaría, habría amado の形を最初接続法に入れていたが、1917年の『文法』以後はこれを「可能法」(modo potencial) に分類している。その前提となる叙法論を要約すると次のようになる。叙法とは動詞の意味の様々な表現の仕方であり、例えば、出来事を現実のもの、客観的なものとして表現するのは「直説法」であり、出来事を願望として、あるいは他の3つの叙法(直説法、命令法、可能法)のいずれかによって示される他の出来事に依存し、従属するものとして示すのは「接続法」である。そこで「可能法」であるが、これは出来事を現実のものとしてではなく、「可能性」のあるものとして示す叙法と説明している。

4.3 Gili y Gaya の Academia 文法批判

1917年以前の Academia その他の伝統文法では cantarí, habría cantado などの形を「接続法」としていたが、それに対する批判としては次のように述べている。「伝統的な文法が -ría と -ra の両形の間にある幾分かの等価値性に惑わされて信じてきたように、それ(-ría 形)は接続法に属するのではなく、直説法に属している。このことを納得するには Dijo que vendría.<彼は来ると言った>の文中の dijo を疑惑、可能性、必要性、または願望を表す任意の動詞に置き換えれば十分である。そうすれば直ちに vendría に換

えて *viniese* または *viniera* と言わなければならないであろう」 このようにして彼は Bello と同じ論法で「直説法」論を展開する。

次に1917年以降の *Academia* の「可能法」説については概略次のように述べている。*cantaría* の形が *Academia* が言うように現実のものではなく、可能性のあるものを表しているのであれば、それは「非現実法」に入れるべきである。これとは反対に、それがたとえ未来の、条件付きの、従って常に仮説的なものであるにしても、「現実性を持ったもの」を表していると考えられるならば、それは「直説法」に加えるべきである。自分は後者の考え方に疑いの余地がないと判断している。

4.3 *Criado de Val* の叙法論

彼の叙法論は概略次のようである。未来としての条件時制はそれを直説法に入れるか、接続法に入れるか、あるいは独立した叙法と考えるかという問題を提起する。その起源に注目するならばそれは直説法に属すると考えるべきであろう。不定詞 + *habere* の未完了過去という語形的起源からして、最初は過去の時点から見た未来の概念を表していたことは間違いない。しかし、この語形に、今日では副次的でしかない直説法的価値を与えて、この問題を解決したと考えるのは軽率なことである。この叙法は次第に領域を拡大してきたので、その最も現実的な解決法は、未来形とセットにして、直説法と接続法の間領域、過渡域にあるものとするのである。この語形の接続法への接近は、特にその意味の類似から、決定的なものになっている。両者は不確実性、条件依存性、仮言性、そして特に情緒性を表現する点で共通している。

4.4 *Esbozo* (1973) における *ría* 形の扱い

Esbozo では *amaría*, *habría amado* の形を「直説法」に分類しているが、概ね Gili y Gaya の意見が採用されていると見られる。ただ時制の名称は異なっていて、*amaría* を *condicional* <条件時制> (Gili y Gaya は *futuro hipotético* <仮説未来> ; Bello は *pos-pretérito* <過去未来>) *habría amado* を *condicional perfecto* <条件完了時制> (Gili y Gaya は *antefuturo hipotético* <仮説未来完了> ; Bello は *ante-pos-pretérito* <過去未来完了>) と呼んでいる。*Esbozo* に示された内容は一応現在の *Academia* の大方の意見と考えてよいと思うが、その序文にも断つてあるように *Academia* の見解としてまだ正式のものにはなっていない。

5. 結び

ría 形の叙法を考えるに当たって、私はここで未来形との関係をとりに上げてみたい。未来形と *ría* 形はラテン語の不定法に *habere* の直説法現在、同未完了過去を加えた形から作られ、共に直説法の語形として誕生し、いわば双子のような関係にあった。また、絶対時制、相対時制の違いはあるものの、両者共示す内容は仮言的であり、「不確実性」を含んでいる。スペイン文法ではどちらかと言えば両者の共通点を重視し、これらを同じ叙法に入れることが多い。私はここでこの両形の違いに注目してみたい。

Dice que asistirá a la reunión. <彼は集会に出ると言っている> (未来)

Dijo que asistiría a la reunión. <彼は集会に出ると言った> (*ría* 形)

この2文で、「彼が言っている」あるいは「言った」時点では「彼が集会に出る」可能性があると同時に「出ない」可能性もある。その意味では「未来」も「過去未来」もなにが

しかの「不確実性」を含んでいる。

Dijo que asistiría a la reunión, pero no lo hizo. <彼は集会に出ると言ったが、そうしなかった>

この場合、発話時には集会は終わっており、話者は「彼が集会に出なかった」ことを知っていて asistiría という表現を使ったことになる。つまり ría 形は「非事実」を承知の上で使うことができるものである。もちろんこの文での用法はあくまでも「過去未来」であり、「未来」が直説法であれば、この「過去未来」の用法も「直説法」的と見なしてよいが、「事実をそのまま表現する」という直説法本来の領域から一歩外に踏み出している。ここが起点となって「非事実」条件文の帰結節での使用を初めとする ría 形の「直説法」以外への叙法域の拡大が可能となり、未来形とは一線を画することになったのではないかと私は考えている。

両者の違いが叙法の違いであると認めた場合、それはフランス文法における「条件法」やスペインの Academia (1917) 文法における「可能法」のような、「直説法」でも「接続法」でもない、第3の叙法を立てる考え方につながるものである。しかし、そうするほどの根拠は今持ち合わせていない。本稿では、叙法について考察を進める上で、未来形と ría 形の違いをどう見るかが一つの重要なポイントであることだけを指摘するにとどめておきたい。ただ、スペイン語の ría 形とフランス語の「条件法」の間には「過去未来」と「非事実の条件文の帰結節での使用」という互いに共通する基本的な用法がある。にもかかわらずこの語形についての両文法における叙法の扱いは同じではない。それはなぜか。このことが以前から私の疑問に思っていたところである。スペイン語の枠を越え、同系他言語をも視野に入れることは叙法の問題を解明する上で有効な方法の一つではないかと考えている。

【注】

- 1)本稿は日本ロマンス語学会第31回大会(1993年5月)統一テーマ「ロマンス語の条件法」の中で口頭発表した内容を修正、加筆したものである。なお、その席で、東京外国語大学の原誠氏より、スペイン語の法・時制の名称については寺崎(1990)の文献があることをご指摘頂き、本稿執筆に際して十分参考にさせて頂いたことを付記しておきたい。
- 2)現用スペイン語の用例は参考文献として載せてある *Esbozo* (1979), *Gili y Gaya*(1960) の他、スペインその他の外国の文法書、教科書、辞書等から引用、あるいはスペイン人インフォーマントに確かめたものを使用した。
- 3)使用テキスト:M.de Cervantes (1605): *Don Quijote de la Mancha*, Facsímil de la Primera impresión, The Hispanic Society of America, Palma de Mallorca, 1968.
なお、用例を拾ったのは第1部の1-13章及び27-34章の範囲である。
- 4)テキストには Menéndez Pidal(1954-56), vol.3 の edición crítica を使用した。
- 5)1492年(Nebrija)から1870年(Bello 他)にかけてのスペイン語時制論には西川(1988)の非常に広範で、しかも詳細な研究がある。
- 6)本稿ではAcademiaの『文法』は1931年版を使用した。寺崎(1990)によれば「可能法」という用語は1917年版から使用されている。ここで注目されるのは Clédat のフランス文法における叙法論である。文法書 Clédat(1896)で彼は「条件法」という叙法の存在を

認めた上で、これとは別に「直説法」の「過去未来」(futur dans le passé)という時制を別立てにしている(§323-326)。更に、論文 Clédats(1910)でも「過去未来」と過去未来以外の条件法の用法を区別し、しかも後者の呼び名は「条件法」よりも「可能法」(le potentiel)の方が好ましいとしている。スペインの Academia が「可能法」の名称を採用したのは Clédats の論文発表の7年後に当たる。(多分両者の間には直接の関係はなかったと思われるが)

7) Criado de Val は「直説法」論者ではなく中間派に入る。最近公刊された Hara(1993)も、結論だけを見れば「直説法」説に分類されることになるが、意味・用法について分析した部分では、むしろこの叙法の「直説法」的性格と「非直説法」的性格の両面性に論旨の中心をおいていて、中間派の指摘にも十分配慮しているところが見られる。

8) *Esbozo* の初版は1973年に出ているが、本稿では1979年版を使用した。

【主要参考文献】

Bello, Andrés & Cuervo, R.J.(1958): *Gramática de la lengua castellana*, Buenos Aires.

Clédats, L.(1896): *Grammaire raisonnée de la langue française*. Paris.

----- (1910): "Futur dans le passé et conditionnel" *Revue de Philologie Française et de Littérature*, Honoré Champion, 24, pp. 141-149.

Criado de Val, M.(1972): *Fisonomía del español y de las lenguas modernas*, Madrid.

Gili y Gaya, S.(1960): *Curso superior de sintaxis española*, 7-a ed., Barcelona.

Hara, Makoto (1993): *El futuro pretérito de indicativo del español*, Estudios Lingüísticos Hispánicos, Tokio, Núm. 8, pp.13-22.

Hernández Alonso, C.(1971): *Sintaxis española*, Valladolid.

Menéndez Pidal, R.(1954-56): *Cantar de mio Cid*, vol. 1-3, Madrid.

Real Academia Española (1931): *Gramática de la lengua española*, Madrid.

----- (1979): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, 6-a ed., Madrid.

Spaulding, R.K.(1958): *Syntax of the Spanish Verb*, Liverpool.

Unamuno, Miguel de (1977): *Gramática y glosario del Poema del Cid*, Madrid.

寺崎英樹 (1990) : 「スペイン語の時制体系と名称」東京スペイン語学研究会『スペイン語学研究』5号

西川喬 (1988) : 『スペイン語時制研究史(1492-1870)』神戸市外国語大学外国語研究所

マルサ, フランシスコ (三好準之助訳) (1993) : 『スペイン語文法評論』三修社